Osaka University Knowledge Archive

Title	<図書紹介>Torsten Blume, Burghard Duhm (編・著)『バウハウス, 舞台, デッサウ : 場面の転換』原題 : Bauhaus. Bühne. Dessau : Szenenwechsel
Author(s)	青木, 加苗
Citation	デザイン理論. 2011, 56, p. 116-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53579
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Torsten Blume, Burghard Duhm（編・著）『バウハウス，舞台，デッサウ：場面の転換』
原題：*Bauhaus. Bühne. Dessau: Szenenwechsel*
EDITION BAUHAUS (Band 21), Jovis／Berlin, 2008

青木加苗／京都市立芸術大学非常勤講師（現 和歌山県立近代美術館）

バウハウスが開校して100年という節目を迎えるまで残り10年を切り，いよいよカウントダウンが始まった。世界各国の其処彼処でバウハウスの回顧的な展覧会が開かれているように，歴史的事象としてのバウハウスを振り返る作業が始まっている。本書はタイトルにあるデッサウに本拠地を置く，バウハウス・デッサウ財団が出版しているシリーズ書籍の第21巻にあたる（2010年８月現在，第30巻まで刊行）。建築やデザインの分野においてバウハウスは幾度となく論じられて来たため，一般向けの概説的資料は数多くあるだろう。しかしバウハウスの中で特異な存在であったバウハウス舞台（工房）については情報が少なく，専門的な研究書を開かない限り，その全容に近づくことは容易ではない。本書はこのバウハウス舞台の概説書としてコンパクトな分量にまとめられており，独英対訳となっているため，多くの人が手軽にその全体像を知るために有効なものである。まずは本書の構成を記しておこう。実際には序列的な章立てはされていないが，ここでは便宜的に番号を付す。

目　次

1　空間とプロジェクト：バウハウス舞台の現在
2　歴史的バウハウス舞台：空間の劇場
3　1976年からのプロジェクトと実験
4　「ダンサー人間」：演じる身体
5　都市という演技空間
6　バウハウス，舞台，デッサウ：1985–2007（DVD）

この目次からもわかるように，先に述べたような1920年代のバウハウス舞台についての解説は「２　歴史的バウハウス舞台：空間の劇場」のみである。だからこそ「コンパクトな概説」なのであるが，内容は意外にも偏りがない。わずか40ページほどの紙面は（対訳があるため実質20ページだが），中心的であったオスカー・シュレンマーについての紹介に終始することなく，バウハウス舞台に関わった様々な人物の活動や舞台構想についても触れており，客観的な記述がなされているために資料としての価値を高めている。

しかし注目すべきは，他の項目であろう。つまり「１　空間とプロジェクト：バウハウス舞台の現在」や「３　1976年からのプロジェクトと実験」というタイトルからもわかるように，バウハウス舞台には「現在」があるのだ。世界遺産に登録されたデッサウのバウハウス校舎では，現在も様々な実践的研究活動がなされているが，校舎内にある実際の舞台においても然り，なのである。

この校舎が再建されたのは，1976年のことである。未だ東西ドイツに分断されていた時代ではあったが，1972年には東西が国交を樹立したことからもわかるように，「東」はちょうど経済的に変革の時期にあった頃である。そして再建後からこの舞台は，演劇やダンス，演奏活動など，様々な催しに開かれてきた。そして80年代後半からは歴史的なバウハウス舞台の作品を再演する試みも不定期に行われてきたが，それは単に「再現」に留まるのではなく，新たな解釈という視座に立っている。よく知られているのは，Theater der Klänge という名のパフォーマンスグ

ループであり，クルト・シュミットらの《メカニック・バレエ》に基づく作品や，シュレンマーの造形原理を解釈し，空間における身体の運動をテーマとした作品を上演している。そして1998年からは，「都市の発展とデザイン及び理論（p. 12）」というバウハウス舞台独自の研究テーマを据えて活動している。

なぜ「舞台」に「都市」なのか。そう疑問に思う人も多いかもしれない。もしくはバウハウスと建築という流れに，その理由を求めるかもしれない。あるいは最近よく耳にする「劇場型都市空間」といった言葉を思い出す人もいるだろうか。しかしこのバウハウス舞台という場に限っては，舞台と都市との関係に，もう一つ別の文脈があるのだ。

それは1990年代の作品から顕著になってきた「空間，身体，デジタルメディアの３極性（p. 16）」というテーマである。1920年代のバウハウス舞台においては，「空間，身体，運動」という問題が扱われていた。この「運動」という問題こそが，他の造形ジャンルよりも舞台が直接的に扱える領域であったことは疑い得ない。そして何十年かの時を経て，「運動」という問題は「映像」や「音楽」を含めた「デジタルメディア」に置き換えられた現在の状況がある。もちろんこれはバウハウスに限ったことではなく，様々な表現形態に共通して起こっている変化であるが。

しかしバウハウスにおいて，特にシュレンマーの舞台に顕著であった，グリッドを持つ空間構造は，そのままデジタルの世界に置き換えられ易かったと言える。本来，シュレンマーの空間における身体運動の概念には，身体を起点に周囲の空間との関係性を測定するという意識があった。主体としての身体の存在である。しかし近年のバウハウス舞台における作品では，このグリッド構造の空間はむしろ，舞台に当てはめられた外部からの客観的測定装置として位置づけられているように思われる。それはまるで立体的な地図で位置情報を調べるような視点である。

考えてみれば前世紀初頭は，機械技術が発展し始めた時代であり，それが身体に直接的にもたらした影響は，人間が持つ力の増幅という意識や，それまでは問われることのなかった主体である人間の意思や動きを，機械との対比の中で発見したため，それをどう表記するかという意識に現れていた。シュレンマーの身体・空間感覚もその一例である。そしてここ何十年かで人間の身体感覚は更に変化したように思われる。それはコンピューターが身近になったことが主な原因であろうが，世界に向けた窓口としてのモニターを見る視線とキーボードの操作感覚に顕著だ。そしてここ数年ではいくつかの携帯端末などに見られるように，手のひらの中に「軽く」握った世界を「指先で」動かす感覚さえ染み付いてしまった。少し前には，人差し指と中指の開閉運動で世界を拡大縮小して見ようなどと，誰が思ったことだろう。そしてこの世界を俯瞰して見るという感覚にこそ，身体を扱う舞台が，今扱うべき問題なのだということに首肯する。都市はその最小単位となるのだ。

本書に記された活動記録は，今のバウハウス舞台が扱う問題を示すと同時に，現在が常に歴史との照応の中にあることを，同じバウハウス舞台という場で，同じ身体というモチーフを通して露にする。このバウハウス舞台は，歴史的な視線を浴びる記念碑的な場所でもなければ，過去の実験的作品を再現上演して振り返るためだけの場所ではない。この舞台は常に「現在進行形」なのだ。タイトルにある「場面の転換」とは，時代の転換が投影される役割を舞台が有しているということを示唆しているように思えてならない。